

From Mother's Lonely Child-Rearing to Rearing with Mutual Support

高山, 静子
地域ぐるみの子育てをすすめるひだまりの会

<https://doi.org/10.15017/9020>

出版情報 : 生活体験学習研究. 2, pp.65-71, 2002-07-31. The Japanese Society of Life Needs
Experience Learning

バージョン :

権利関係 :



孤独な子育てから出会いの多い子育てへ

高山 静子

From Mother's Lonely Child-Rearing to Rearing with Mutual Support

Takayama Shizuko

要旨 「地域ぐるみの子育てをすすめるひだまりの会」は、3年程前に活動を始めたボランティアグループである。公民館や集会所、空き教室などを利用して、福岡市とその近郊で月1回～週3回のペースで、子育てコミュニティスペース「ひだまりサロン」を開いている。ひだまりサロンは「子育てコミュニティ武蔵野市立0123吉祥寺」をモデルにしており、家庭で育児をする乳幼児の親子を対象に、子どもの主体的な遊びの場、親の交流・情報交換・相談の場をつくっている。参加は自由であり、毎回15組～30組程度が訪れる。私は「0123吉祥寺」へ見学に行き、会の創設に関わり、現在会のなかではサロンづくりの支援を行っている。本稿は、会を始めた経緯から現在感じていることまでをまとめたものである。

1. 活動の経緯

1-1. 赤ちゃんや幼児が大変だ

私は5年ほど前に保育園を家庭の都合で退職し、その後育児サークルでわらべうたやリズム遊びの講師をしたり講演を行っていた。そこで気になったのは、地域で育つ子どもたちが大変不健康であるということであった。1時間の講演の間、母親のひざにボーッと座っている赤ちゃん、母親のひざに乗ることや体を触られることを嫌がる幼児、親とも目が合わないコミュニケーションがとりにくい幼児、それが一人二人ではなく、毎回数人いることに私は心底驚いた。長年読みきかせをしている人から「子どもたちが変わってきた」という話は聞いていたが、わずか1、2歳の段階で無気力、あるいはコミュニケーションがとれない子どもを見るようになると、乳幼児期の子どもとその親に支援が必要だと強く思うようになった。

保育園でも毎年驚くような子育てをしている親が入園してきた。しかし適切な支援によって、親は必ず親

として成長するということを体験していた。そして特に親が親として成長著しいのは0歳児クラスの親であることを実感していた。

しかし、講師という形では支援が困難だった。プログラムのなかで、親に自然な子どものあやし方、しかり方、遊びの見守り方を見せることはできにくい。子どもたちに対して、自然で主体的な遊びを保障することが難しい。大勢の親子を対象にして、室内の体育館のような遊びの素材がない場所で可能な遊びは限られている。そこでは大人が子どもに遊びを指導していることも気になった。講師が行う手遊びやリズム遊びという名前がつくような遊びを「子どもの遊び」と勘違いする親もいた。赤ちゃんでも幼児でも子どもは主体的に遊ぶということと、見守る姿勢を親に伝えたいと思ったが、そのような遊びの支援を行うことが難しかった。

また子育ての主役は子どもと親であるはずなのに、講師ではまるで私が主役のようだった。代わる代わる

連絡・別刷請求先 (Corresponding author)

地域ぐるみの子育てをすすめるひだまりの会 (〒814-0152 福岡市城南区提団地1-201)

TEL 090-4348-5004 s.takayama <pf6s-tkym@asahi-net.or.jp>

専門家と呼ばれる人たちが親を指導することによって、親を主役から脇役に追いやり、親の依存性を高めているようにも思えた。子どもの主体的な遊びと、親が親として成長するような本当の支援がしたいと、支援の形を模索していたとき「子育てコミュニティ0123吉祥寺」を知った。この形こそ、子育て・親育ちを支援できる方法だと思った。

1-2. 活動の経緯 親が運営に参加

しかし一市民ではそのような施設を運営することは難しい。幼児教室をつくれれば資金的に運営できる。しかし誰もが自由に利用できる自然な子育てをする場所が目標であったので、親からそんなにお金をとることは考えられなかった。「0123吉祥寺」を見学に行くと、森下久美子園長先生は「市民ではこういう施設をつくることは難しいと思いますよ」とおっしゃいながら、一人の市民でしかない私に丁寧に施設を案内して下さった。またその頃参加していた福岡市教育委員会主催の「学びボランティアカレッジ」では、福岡教育大学の横山正幸先生から「行政に頼らずに自分たちでやってみませんか」というアドバイスをいただいた。お二人の声はその後耳から離れることがなく、私はついに仕事を減らして、ボランティアという形でひだまりサロンを始める決意をした。

しかし場所を借りようと思ったがどこでも断られた。「サークルがあり子育て支援を行っているので必要ない」「子どもならその辺でどこでも遊べる。わざわざ公民館で遊ぶ必要はない」。しかし公園には人がいないこと、家のなかで引きこもっている親子が地域にいることを訴え、やっとある公民館の一室を一月に一度借りることができた。

初めは子育てを一段落したボランティアが準備や片づけを行っていた。しかし私たちがボランティアで開いていることを知ると、準備や片づけを手伝う親がでてきた。一人二人とスタッフに加わり、自分の地域でも開きたいと、自ら公民館に掛け合い校区にサロンを開く人も現れた。現在では会が運営するサロンは5箇所であり、開設を支援したサロンは10箇所をこえた。3年経った今では、会の代表・副代表をはじめスタッフは、ほとんどが初めはサロンを利用した親となっている。もしもひだまりサロンが行政の子育て支援施策であり、私が行政の職員であったなら、親たちは自主

的に運営を手伝ったりサロンを開いたりしただろうか。私たちがボランティアであることが、親の参加を生み、その結果親自身が問題に気づき、主体的に状況を改善しようとする力を、エンパワーメントすることにつながったと思う。

保育のなかでは主体性の尊重と、遊びと環境を通して子どもを育てるということをいつも考えてきた。サロンでの親支援についても同じように考え、どのような環境をつくれれば親が親として成長できるのかを考え続けた。その結果、親が主体者として子育てを行っていくために必要なものは「仲間」と「生きた情報」とそれらに出会える「場」の3つであると考えようになった。親も私も、人とつながることによって、より主体的になった。見よう見まねで子育てをする場を得ることで、親は自信を持って子どもを育てるようになっていく。そしてサロンの運営に関わることにより、社会全体に目を向け、課題に気づき、状況を改善しようという社会参画の意識も少しずつ生まれている。

2. 活動の内容 子どもも親も主体者

公民館や集会所で行っているサロンは、各サロンに1～3名ほどのスタッフがいて運営を行っている。公民館や集会所は会場を常時借りることは難しく、今のところ月に1、2回程度で時間は10時から13時まであるいは14時までである。活動内容は、子どもの主体的な遊びの場とコーヒーや情報のコーナーをつくり、親子で自分の好きな時間に来て、自由に利用してもらっている。親たちは子どものそばに座って一緒に遊んだり、コーヒーを飲んだり、情報をながめたりと思いつきのスタイルで過ごしている。

今年の5月からは補助金を得て、幼稚園の一室を借りて「わいわい子育てスペースひだまりん」というモデルとなるスペースをつくった。日時は、毎週火・水・木の10:30～14:00である。スタッフはボランティア2名が常時いる。こちらは見学者や研修を受け入れて、サロンを各地域に広げるために開いている。見学希望者は数ヶ月先までいっぱいであり、サロンに対する関心の高さを感じている。

3. 活動のなかで感じていること

3-1. 子育ての実態

サロンのなかでは、次のような子育ての現状に気づいた。

- ① 「近所の子どもが声はするが姿を見ない」という訴えが多い。「友だちをつくりたくても、家の周囲で出会うことができない」という。
- ② 子どもを遊ばせるために公園に連れていくという日課がなくなりつつある。家か駐車場で遊ばせる、買い物に連れていく程度で子どもを公園に連れていけない親もいる。ショッピングセンターのなかで遊ばせている人も多い。
- ③ 「公園に行っても人がいない」という訴えが大変多い。それでも公園で遊ばせたいと考える親は、人がいる遠くの公園へ車や自転車で連れていく人もいる。
- ④ 子どもの友だちを探して、育児サークルやイベントをかけもちしている人がいる。
- ⑤ 集合住宅に住む親は、家のなかでも子どもに「あばれてはだめ」「しずかにしなさい」と怒っている。苦情をうけるため「家には子どもの友だちを呼ばない」と決めている人もいる。
- ⑥ 「今まで他の子どもと遊ばせたことがない。ずっと私と二人で家にいるので。私も他のお母さんと話したのは健診のときぐらい」という人が来る。
- ⑦ 夜遅く眠るという子どもが多い。(1歳半～3歳8ヶ月の57.3%が夜10時以降に就寝(ベネッセ教育研究所・2000年調査)理由を尋ねると、「11時になったら自然に寝る」「寝かせようとしても寝ない」と寝かしつけるということを知らないか、寝かしつけることができないことが多い。
- ⑧ 起きる時間が遅いため、朝食を食べていない子どもや、お菓子やジュースばかりという偏った食生活の幼児がかなりいる。
- ⑨ 親はきれいだが、顔を洗っていない、髪の毛をといてもらっていない子どもが目立つ。あかぎれをつくっている子どももいる。理由を尋ねると「子どもが嫌がるから」という。
- ⑩ 乳児期の親は、抱っこへの過信がある。「家では一度も子どもを下に降ろしたことがない。昼寝の間も抱っこしていて疲れる」「(ずっと抱っこして

いて)寝ないと夕食が作れないので最近晩ご飯が遅くなる」という訴えがある。

- ⑪ 大人向けテレビ番組を親と一緒に長時間見ている乳幼児がいる。
- ⑫ 15年ほど前より、ビデオが家庭へ普及し、赤ちゃんや幼児がビデオやテレビを視聴するようになっている。(前述調査では1歳のテレビ平均視聴時間は3時間5分)家事の間、赤ちゃんをラックに入れて、ビデオをつけている親も多い。アンケートをとったことはないが各家に行くと2、3歳で、10～20本程度のビデオを持っている。
- ⑬ 乳幼児向け通信教育教材が増え、早期教育ビデオやCDをくり返し視聴させられている赤ちゃんや幼児が増えている。
- ⑭ サークルで教えてもらった手遊びやお遊戯を「子どもの遊び」と思いこんでいる親がいる。家でも手遊びを何度もしていたり、音楽をかけて踊らせたりしてずっと子どもの相手をしている。遊びは大人が与えるものと思っている親がいる。
- ⑮ 子どもがひとり遊びをすることを知らない親がいる。「家では私が相手をしていないと遊ばない」(2歳)「うちの子はひとり遊びをしたことがない」(3歳の親)「子どもがひとり遊びをするなんて知らなかった」(3歳の親)
- ⑯ 初めて来た親は、日頃子どもをひとり遊びさせていないのではないか、と思える行為がある。子どもの姿を目で追わない親も多い。サロンのような自由な場所では、子どもとどうやって遊んだらよいのかとまどっている姿もみられる。特に目立つのが赤ちゃんをずっと抱っこしている親である。
- ⑰ 「初めて子どもが私のそばから離れて遊んでくれた。家でも公園にいてもひざから離れなくていらいらしていた」この感想が一番よく聞く感想である。遊ばない、遊べない乳幼児がいる。
- ⑱ ごっこ遊びをしない幼児、みたてをしない2、3歳児に出会う。そのような子どもはおもちゃを見て「あか」「まる」と言ったり、おもちゃを投げた遊ぶなど遊びがアンバランスである。
- ⑲ 目が合わない、話しかけても反応がない。人をこわがる、または多動な幼児が目立つ。「子どもが乱暴すぎて公園にもサークルにも行けない」とい

う電話での相談も数件あるが来ない親もいることから、そのような子どもを抱えて自宅にひきこもっている親もいると思われる。

- ⑳ 2、3歳で自分の子どもを、しつけができない、手に負えないと感じている親がいる。

3-2. 見よう見まねで子育てができない状況

サロンで気づくのは、①～⑥のような他の子ども子育ての仲間に地域で会うことができない状況である。サロンでは友だちをつくっている親が、日常生活のなかでは他の親と出会えなかったと言う。道路の整備により、家の周囲で子どもを自由に遊ばせることはできなくなった。家の周囲にも公園にも、親子連れは少ない。また福岡市には市内に児童館は一館しかなく、子育て中の人同士が出会える施設はほとんどない。今、子育て仲間と出会うためには、育児サークルやイベントなどの子育て中の人が集まる機会を探し、そこへ出かけていくことが必要となっている。

他の子どもや子育ての仲間に地域で出会う機会が少なく、具体的な育児の方法を知る機会も少なくなる。その結果⑦～⑳のような極端な育児行動が生まれてしまうのではないだろうか。

極端な育児行動には、孤立化の他にもう一つの原因が考えられる。それは育児を代行する商品やサービスの増加により、親自身が育児体験を積む機会が減っていることである。紙オムツの普及によりオムツを替える回数は減った。赤ちゃんが泣き出すとビデオを見せる、CDを聞かせる、おしゃぶりをくわえさせる、お菓子を食べさせる、ラックに入れるなどを当たり前のように行うようになっていく。育児雑誌ではこれらの商品がいかに子育てに有効かを訴える。これらの商品がない頃、親はなんとか泣きやませようとあやしたり、歌ったり、家の周囲を歩き回ったりするしかなかった。親はその試行錯誤のなかで子どもをうまく泣きやませることができた、寝かしつけることができたという育児体験を積み、それによって育児の効力感を感じることができた。手軽な育児を推奨するような風潮もある。気軽に子どもを預けてショッピングを楽しめるようなサービスも増えている。育児の商品化や外注化は、親が子どもと関わり合う機会を減らし、親の育児力の獲得を妨げているのではないだろうか。

3-3. 子どもの不健康が親の育児負担の増加に

極端な育児行動は、それ自体が育児負担を増加させる。例えば「自分の時間が全くなく育児が辛い」と訴える親のなかには、子どもを夜の11時、12時まで起こしている親も少なくない。またわが子を相手に、手遊びや親子遊びを始終していれば、子どもがいる生活を負担に感じるだろうし、家事の間はビデオを見せるしかないだろう。赤ちゃんが寝るまで晩ご飯を作れないと、赤ちゃんを寝かしつけるために毎夕ドライブする母親もいた。ちょっと他人の育児方法を見る機会があり自然な子育ての方法を知れば、もっと育児は楽になるはずである。

また様々な商品は、子どもたちの成長や発達に直接影響を与えている。乳児期からの長時間のビデオ・テレビ視聴は、子どもから遊びや人との関わりの体験を奪ってしまう。長時間視聴は動きの制限にもつながる。乳児期に体験する感覚や運動が少なければ、子どもの発達全体への悪影響も懸念される。食事や睡眠の不足は情緒に影響を与える。このように極端な育児行動は、子どもの成長や発達に悪影響を与え、子どもが不健康に育つ可能性が高い。

子どもの不健康さは、親子関係を悪化させ、親の育児不安と負担感を増加させる。例えば情緒が不安定で、きーきーと泣き叫んだり、ぐずぐず不平を言うといった不快な感情を発しやすい子どもであると、親も不快な感情が湧くのではないだろうか。また目が合わない、話しかけても知らん顔をしているといったコミュニケーションをとりにくい子どもであると、親は育児に無力感を抱き、あやすことやしつけをすることをあきらめ、時には虐待に向かうことも考えられる。

3-4. 「放っておくと不健康に育つ」時代

これらを含めて現在の子どもと親の状況を図に表してみたものが図1である。都市化による地域コミュニティの変化、自然環境の喪失、子育ての商品化・外注化は、親の孤立を呼び、直接的・間接的にしつけ・睡眠・遊び・人間関係という子どもが成長するために不可欠な体験を不足させ、子どもを不健康にし、結果として親の育児不安や負担を増加させていると思う。現在の乳幼児の育成環境は「放っておいても子は育つ」どころか「放っておくと子どもが不健康になる」といえる。サロンで、子どもが母親がそばにいるのを忘れ

たかのように夢中で遊び、ふと母親の顔を見上げてにっこりと笑うことがある。そんなとき母親は満ち足りた笑顔を浮かべる。目を輝かせて遊ぶわが子を見て「この子は良い子だったんですね」と言った親もいた。子どもが健やかに育っているという実感があり、子どもとの関係が良い場合には、夫が育児に協力しない、経済的に困難であるなど育児不安の要因があったとしても「子どもはかわいい」または「育児は楽しい」という肯定感を感じることができよう。子どもが健やかに育つための支援は、親と子の関係を良くし、育児不安と負担感を軽減するものであると考えている。

(図1)

3-5. 現在行われている支援の問題点

このような状況に対して、現在行われている子育て支援の内容は、必ずしも育児の仲間を得たり、親自身が育児体験を積むものにはなっていないと感じている。育児の方法を書いたパンフレットは参考にはなるが、仲間は得られないし、育児体験を積むことはできない。多くの親子と出会うことができる育児教室や子育てイベントに参加しても、育児の仲間を得られるとは限らない。仲間づくりを工夫しているところもあるが、講師の指示に従うばかりのイベントや、講師の話聞くだけの場合、他の人と話をする機会もなく、参加した人がばらばらに帰っていく姿を見かける。また育児教室や講演会のなかでは、赤ちゃんがハイハイをして探索をしたり、自然に遊ぶ姿を目にする機会は少ない。その理由の一つは、ほとんどがその時間のプログラムが組まれていることである。もう一つは親が、講師や参加者に迷惑をかけまいとして、わが子の自然な動き

を抑制するためである。育児教室やイベントに参加して知識を得ても、自然な子どもの姿や、他の人の育児を見る機会が少なければ、具体的な育児の方法はわからないままである。一日中子どもを抱っこしているというある親は「子どもは抱っこすることが大切だ」と講演会で聞き、それを実行しようとしていた。生きた情報が得られない状況のなかでは、得た知識を過信したり、鵜呑みにしてしまうことがある。

現在の子育て支援のもう一つの問題点は、子どもの主体的な遊びを奪い、親の過干渉を助長しているのではないかということである。先生と呼ばれる人が子どもに遊びを与えることによって、遊びは大人が教えるものと勘違いしてしまう親がいる。育児教室で教えてもらったように、家でも手遊びを何度もしたり、音楽をかけて踊らせたりして、ずっと子どもの相手をしている人もいる。

子どもたちが自由に遊ぶサロンでは、親はその姿に驚き「子どもがひとり遊びをするなんて知らなかった」「子どもって自分で遊ぶんですね」「子どもって自由に遊ばせていいんですか」「目からうろこが落ちた」等の感想がでる。「わが子が初めて私から離れて遊んでくれた」という感想もよく聞かれる。ところがある年齢以上の親たちは子どもは放っておいても遊ぶものと思っており、このような感想を聞くととても驚く。いつ頃から、乳幼児に遊びのプログラムが必要になり、大人が遊んであげるものになってしまったのだろうか。多くの親を集めて専門家あるいはリーダー役の人が、遊びや知識を与えるという現在の支援の方法では、親に遊びへの無理解と過干渉を引き起こす危険があると感じている。

その結果、子どもたちは主体的な遊びを剥奪されてしまう。サロンでは親子の適切な距離感がなく(本当に今日初めて、子どもが親から離れたのだろう)と思うことがしばしばある。よちよち歩きの子どもがそばから離れてもその姿を目で追わない親や、反対に子どもの真後ろをついて歩く親がいる。子どもも親の位置を確認せずに遊び、何かを見つけたり喜びがあっても、親を振り向くという参照行為が見られない。ある育児サークルの主催者は「親たちはプログラムがないと来ない」と述べていた。リズム遊びや手遊びのような〇〇遊びと名前がつくような遊びを子どもの遊びである

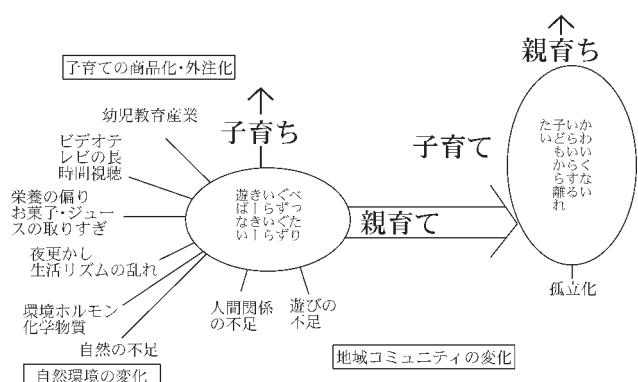


図1 「子育て・子育てトーク2000報告書」地域ぐるみの子育てをすすめるひだまりの会 2001. 3

と思い、穴を見つけて石を落としてみるといった子どもの行為を遊びと思えないような親を、子育て支援のなかで育てているのではないだろうか。子どもが作り出す遊びを尊重できない親が、子どもの発想や自主性を大切にすることができるだろうか。子育て支援の内容、特に遊びの質について慎重に考え直す必要があると感じている。

4. 仲間と生きた情報に出会う場をつくる

現代は、乳幼児が健やかに育ちにくい時代であるということを述べてきた。私たちは初めて機械が子どもを育てる時代を迎えている。赤ちゃんのときから親のまなざしよりもビデオの画面を見つめた子どもが育っている。家庭生活のなかには様々な電化製品、化学物質、加工食品等が加わり、それらが子どもの発達に与える影響は検証されないまま、生活環境だけが急速に変化している。このように急速に変化する社会にあっては、科学的な検証は追いつかない。このような時代だからこそ、親・生活者の直感が重要になると思う。そのうえ育児行為の伝達ができる場がなく、営利目的の情報が親の周囲にあふれているような状況では、子どもを健やかに育てるといことはより困難になる。親には情報を選び取る主体性も必要である。

「ひだまりサロン」にはビデオもなく、子どもと遊んでくれる先生もいない。遊びの素材はあるが、刺激で子どもを引きつけるだけのおもちゃも置いていない。親自身が、わが子や他の子どもと過ごすなかで、育児の知恵や直感というものを少しずつでも獲得することができればと考えている。あやす、遊ぶ、いきかせるといった一つひとつの育児行為を親自身が体験することによって、主体的な育児の姿勢を育んでほしいと思う。

親は、寝かしつける、話しかける、遊ばせる、ごはんを食べさせるなど、子どもを育てるために日々必要な具体的な情報を必要としている。他の人の育児を見ることができれば、親はそれらを学ぶことができる。例えばサロンで「赤ちゃんが夜寝ないんです」という人が、他の人が寝かしつけている姿を見て「そうやって赤ちゃんって寝かせるんですね」と驚き、翌日「昨日やってみたら寝ました。うれしい」と報告してくれる。お弁当を一緒に食べているときに、わが子

と同じ年齢の子がじっと座って食べる姿に驚き「どうやってしつけをしたのですか」と尋ね、親によるミニ育児講座が始まる。また「サロンに通ううちに、他の人を見ていつの間にか自分も叱れるようになった」と言う人もいた。

サロンには口うるさく叱る人、にっこりといつも微笑んでいる人、子どもにぴったりとついていて人、子どもに背を向けてコーヒーを飲んでいる人、さまざまな人が来る。親たちはそれらの生きた多様な情報のなかから、自ら学び取っていく。何も教えていないにも関わらず、帰りに「今日は本当に勉強になりました。ありがとうございます」とお礼を言う人もいる。特に赤ちゃんをもったばかりの親は学ぶ意欲が高く、他の人の様子をじっと見ている。様々な育児方法や親子関係と出会い、見よう見まねで育児ができる環境があれば、親は自ら学びとり、次第に育児力を獲得することができるかと実感している。自然な育児スペースであるサロンは、多様な人と多様な情報に出会うことができる。そこでは混沌のなかから自らの切り口で情報を取り出すことができる。多様な情報のなかから自ら取捨選択し、試行錯誤を繰り返すことによって、主体的な育児の姿勢は生まれていくのだと思う。

おわりに

サロンで親と接していると、当然すぎて取り上げられないことがないが、親が心から望みながら満たされにくい欲求に気づく。それは次のようなものである。

1. 子どもを健やかに育てたい
2. 子どもをのびのびと遊ばせたい
3. 子どもの友だちがほしい、さまざまな人と関わりを持たせたい
4. 子どもと良い関係をつくりたい
5. 育児のこまごまとしたやり方を知りたい
6. 他の人の育児を見たい
7. 育児中の人と話したい、同じ立場の友だちがほしい
8. ちょっとしたことを気軽に尋ねたい

これらの欲求は、かつて地域で自然に手に入れることができたものではないだろうか。それらが日常生活で手に入らなくなったために、親たちは子育てが苦しいと訴えているのだと思う。かつて多様な人と、多様

な生きた情報は地域のなかにあった。しつけも遊びも地域のなかで自然と行われた。子どもは地域でさまざまな人と関わり、遊び、親は他の人の育児を見て学ぶことができた。そのような地域を失ったことで、子どもは遊び場をなくし、親は見よう見まねで子育てができなくなっている。これからは親と子と地域の人とが、日常的に自然に関りのもてる新しい場を、地域に意識的につくる必要があると思う。子どもが育ち親が育つ、子育ての知恵を伝達しあい、仲間と生きた情報を得て、主体的に育児に取り組むことを支援する、

そうした場づくりは、これからますます必要になると思う。

参考文献

- 柏木恵子+森下久美子 1997年 「子育て広場0123吉祥寺」ミネルヴァ書房
IPA 日本支部 1999 「環境の変化と子どもの遊び」
柏女霊峰・山縣文治編著 1998年 「新しい子ども家庭福祉」ミネルヴァ書房